

# ☆☆図書室だより☆☆ ☆第50号☆

## ☆☆- 図書委員会よりお知らせ - ☆

動物たちも困惑する激変の社会環境でも、今年も待降節を迎えられましたことを感謝します。おすすめしたい本と併せて 新しく入った本の紹介をさせていただきます。

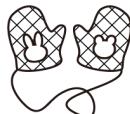


### 『イザヤ書を読もう 下 慰めよ、私の民』

大島 力 著 日本キリスト教団出版局 [黄 193.41 02]

季節はめぐり、今年もアドヴェントからクリスマスに向かう頃となりました。またもや音楽の話で恐縮ですが、ヘンデルのメサイアが盛んに演奏されるのもこの季節です。メサイアを理解するには聖書を理解しなければなりません。メサイアの歌詞、特に第1部の預言から降誕に至る部分は、イザヤ書、それも第2イザヤと呼ばれる40章以降からの引用が圧倒的に多いのです。冒頭、「慰めよ、私の民を」は40章から採られています。大島先生は、はっきりとこれを第2イザヤの中心的使信と位置づけます。そしてメサイアでは50章や53章の主の僕の歌が引用されます。キリスト教会は「主の僕=イエス・キリスト」という公式を短絡的に覚えこんできましたが、大島先生は「主の僕が誰であるのか」については慎重に、丁寧に考察しています。もしあなたがメサイアをより良く歌おうとするなら、またより良く聴こうとするなら、聖書とこの本を並べて、併せ読むことをお薦めします。

( 阿佐ヶ谷教会 副牧師 太田好則 )



### 『共に生きる生活』

ディートリッヒ・ボンヘッファー 著 森野善右衛門訳 新教出版社

本書はボンヘッファーの告白教会牧師研修所長時の経験から生まれ、キリスト者の共同生活についての実践的・靈的な叙述です。ナチス政権下の1938年に書かれました。39才で絞首刑にされた彼の死後、ともすれば“ヒトラー暗殺計画に加わった牧師”というセンセーショナルな面が取り上げられ勝ちですが、彼は元々「教会は、礼拝を政治や耽美主義に引き渡してはならない。牧師は、道徳家(モラリスト)や、扇動者(デマゴーグ)、また坊主臭い人間であってはならない。そのような態度では、この世を克服することはできない」と強く主張し、「教会とはキリストの現臨である」とした人でした。彼は教会に人間的な理想像を持ち込むことなく、むしろそれが打ち砕かれるところに神の恵みがあり、真実なキリスト者の交わりの認識へと導かれるのだと言います。本書には、孤独と交わりの両方の大切さと、慎みをもって仕えることの大切さを今一度見つめ直すための指針が示されています。

( K.K 神学生 )

「図書室だより」のバックナンバーはこちらへ →

<https://www.asagaya-church.com/library-diary/>



《ご寄贈書》	書名	著者名・出版社・発行年など
クリスマスの物語 ライオンと一角獣とわたし	シャネット・ワインター／ソーリースペード ツヴェルガー 絵 池田香代子 訳	BL出版 2013.12.1 [黒 726.6 Wi]
すべてには時がある 旧約聖書「コヘレトの言葉」をめぐる対話 別冊NHKこころの時代 宗教・人生	若松英輔 小友聰 著 NHK 出版	2024.8.5 [橙 193.35 Wa]
視よ、この人なり	小山晃佑 著	同信社 2007.9.25 [緑 198.34 Ko]
時速五キロの神 同信新書 6	小山晃佑 著 望月賢一郎 訳	同信社 1997.4.24 [緑 198.34 Ko]
旧約聖書外典(上) 講談社文芸文庫 セA1	関根正雄 編 村岡崇光 他 訳	講談社 1998.12.10 [黄 193.9 Se]
旧約聖書外典(下) 講談社文芸文庫 セA2	関根正雄 編訳 新見宏 訳	講談社 1999.1.10 [黄 193.9 Se]
使徒教父文書 講談社文芸文庫 アC2	荒井献 編訳 佐竹明 他 訳	講談社 2022.2.7 [黄 193.9 A]
アウグスティヌス講話 講談社学術文庫 1186	山田晶 著	講談社 2009.12.1 [黒 132.1 Ya]
ヨブ記講演 岩波文庫 青119-10	内村鑑三 著	岩波書店 2022.1.14 [橙 193.32 U]
70歳からのキリスト教 聖書でたどる人生の旅	大澤秀夫 著 日本キリスト 教団出版局	2024.11.1 [橙 193.04 O]
55歳からのキリスト教入門 イエスと歩く道	小鳥誠志 著 日本キリスト 教団出版局	2018.3.1 [赤 190.4 Ko]



## 「70歳からのキリスト教 聖書でたどる人生の旅」

大澤秀夫 著 日本キリスト教団出版局

本年10月21日 Aさんが97歳で召されました。コロナ蔓延以前の祈祷会に Aさんは必ず出席されてました。20年ほど前だったか Aさんから「私は毎日聖書を読み、退職後、4回通読しました」と伺いました。まだ1回も通読したことの無かった私は恥ずかしくなりました。X(旧ツイッター)に「ほやのぉ」名の投稿で「今年も聖書通読が終わろうとしています、今年で32回(他の訳を含めると倍以上)」(2022年12月12日)がありました。驚きました。信仰生活では日曜日の礼拝出席、毎朝夕、食前の祈り、聖書を読むは基本です。しかし私はかなりサボってます。ましてや聖書通読をやです。定年退職後一念発起、聖書通読を始めました。この本は聖書通読後、その数々の物語を思い出し、記憶を整理するのに、またこれから通読するのにもとても役立ちます。聖書とともににお勧めします。さて、私が何回聖書通読をしたかって、それは聞かないで下さい・・・

(信友会 m )



## 「クリスマスの物語 ライオンと一角獣とわたし」

シャネット・ワインターソン文 リスペート・ツヴェルガー 絵 池田香代子 訳 BL出版

聖書に一角獣が登場するの?と思われた方があるかもしれません。

調べてみると欽定訳聖書に「一角獣」は出てきます。(その後に出版された聖書では「野牛-のうし」と訳されています。)

著者は、ペンテコステ派の厳格な家庭で育てられました。10代で家を勘当された彼女ですが、苛烈な半生を感じさせない、美しい聖誕物語です。飼い葉桶を中心に俯瞰する、よくある降誕劇ではなく、動物の低い視点から観た光景を丁寧に、そして、ちょっとのユーモアを込めて描かれています。動物たちは与えられた役割を真摯に務めます。その聖家族を見守るさまは、まるで映画のように生き生きと表現され、綴られる詩的な文章は、あたかも静謐な音楽が聴こえるかのようです。

まずは理屈抜きて、浸っていただきたい絵本です。教会に行ったことが無くとも、どなたにでも、お勧めできる聖夜の物語(ナラティブ)です。

神の御子は今宵しも。メリークリスマス。

(地の塩会 m.i.)